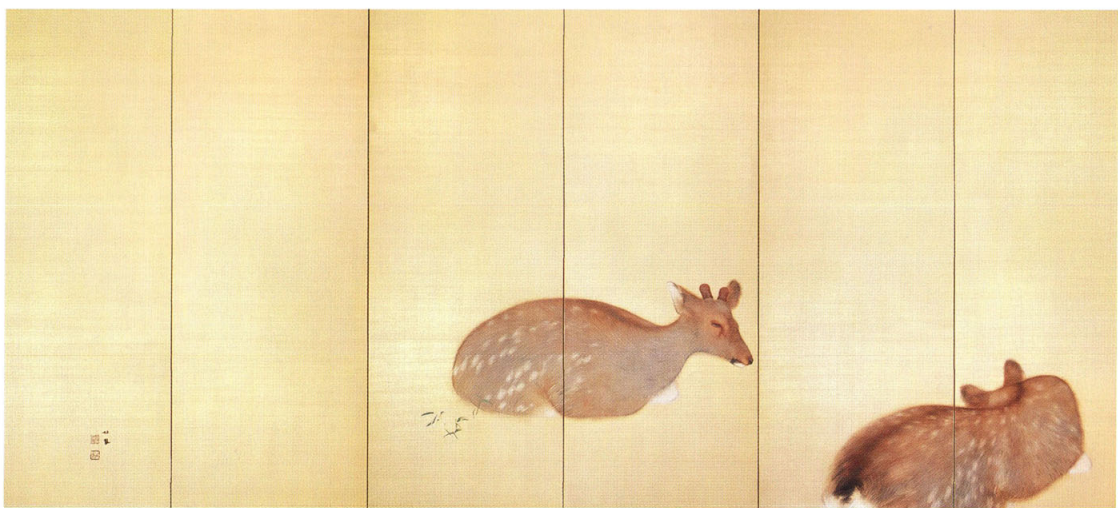




右隻



<参考>左隻

25 和暖 竹内栖鳳 六曲一双のうち右隻

絹本着色 大正十三年（一九二四）  
本紙一六・四×三五・四〇

竹内栖鳳は、近隣の土田英林に絵の基礎を習った後、幸野楳嶺に入門して本格的に絵の修行を始めた。楳嶺のもとで円山派の写実的描写技術を習得したが、明治三十三年（一九〇〇）にパリ万国博覧会を視察するべく欧州に渡り、現地の風物や美術品を実見して大きく画風を發展させた。

本屏風は、大正十三年の皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王の御結婚を祝って、京都府より献上された作品である。鹿はもともと吉祥画に描かれる動物であるが、和やかに身を寄せ合う鹿たちの姿には、御結婚されたお二人が仲むつまじく、いつまでも平穏で過ごされることを願う気持ちが込められている。

軍鶏から猿、狐まで自分で飼える動物は実際に飼ってその生態を観察し、虎などを描くにも動物園に通って写生をしたという栖鳳は、鹿に関しても奈良へよく出かけ写生を繰り返していたという。鹿のしなやかな姿態、栗色の柔らかな体毛など、本図の鹿の描写にも入念な写生の成果が認められる。栖鳳の観察眼を示す弟子の話として「先生は非常に鋭い観察力の持ち主だ。（中略）絵の話があつて時、『鹿の足と云ふと云ふ風に…』と、緩く握った拳をヒョイとひねつて見せられた其手首の具合（中略）夫等が皆さながらの真物を直覚させ」たという（『栖鳳と大観』『芸天』第三十五号、昭和二年二月）。実物写生に重きを置き、対象の真を写し取ることを目指した応挙の姿勢は、時代を超えて栖鳳にも受け継がれていたのである。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections